Hokuriku University

カール・ポパーの経済学方法論

鉢　野　正　樹

Karl Poppers Methologie der Wirtschaftslehre

Masaki Hachino

Zusammenfassung

§1. Karl Popper sagt, daß die Welt dreierlei geteilt werde. Die drei Welten werden von ihm "the world 1", "the world 2", und "the word 3" gehießen. "The word 1" ist die Welt des Objektes, mit der sich die Ontologie beschäftigt. "The world 2" ist die Welt des Subjektes, mit der sich die Epistemologie beschäftigt. "The world 3" ist die Welt des subjektierten Objektes, mit der sich die Wertologie beschäftigt. Nach meiner Meinug bezieht sich die Wissensphilosophie Poppers hauptsätzlich auf "the world 3". Deshalb will ich seine Philosophie die Wertologie nennen.

§2. Seine Philosophie besteht aus dreierlei Kritiken. Erstens spricht sie "dem Essentialismus" wider, weil dieser die "materiale" Erkenntnis des Objektes behauptet. Popper tadelt ihn deswegen, weil der Essentialismus "das Abgrenzungsproblem", um das die Grenze der vernüftigen Erkenntnis von Kant befragt wird, außer acht lassen will. Zweitens spricht sie auch "dem Positivismus" wider, weil dieser die "formale" Erkenntnis des Objectes verneint. Popper will dagegen die Möglichkeiten der gesetzmäßigen Erkenntnis bejahen. Drittens kritisiert sie heftig "den Historizismus", weil dieser das übernaturliche Gesetz der Historie und den übermenschlichen Gesamtplan der Gesellschaft behauptet. Popper will dagegen die unüberwindliche Grenze der menschlichen Erkenntnis behaupten, die Hume als "Induktionsproblem" und Kant als "Abgrenzungsproblem" erkenntnistheoretisch befragen.

§3. Poppersche Wertologie handelt hauptsächlich mit der Geltung der Erkenntnis. Deshalb spricht sie die Wissenschaf an, daß diese nach Möglichkeiten im Gebiete der "Welt 3" bleibe. Sie spricht die Wissenschaf auch an, daß diese sich in "der Welt 2" mit der Beschaffung der Hypothese befriedige. Sie spricht die Wissenschaft weiter an, daß diese in "die Welt 1" nicht tiefer als die empirische Falsifizierung es beanspreche

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

eintrete. Nach meiner Meinung liegen die Nachteile der Popperschen Methodologie darin, daß sie den historischen und soziologischen Wissenschaften die realistische Erkenntnis verbaut.

一、問題提起

―「理論」は「現実」への窓か壁か？―

私が，はじめて経済学に触れたのは，大学に入り，経済学の講義を聞いた時であった。以来，二十有余年の歳月が流れた。私の齢も，四十代の半ばを数えるに至った。この頃になって，やっと，私には，経済学が分かりはじめるようになったような気がする。経済学における、「理論」や「歴史」が分かるようになって来たような気がする。と同時に，経済学における「理論」や「歴史」に，その系統の如何を問わず，異常な興味を覚えるようになった。これからは，経済の問題について，それが現在のものであれ，過去のものであれ，深い興味と関心をもって，追求してゆけそうな気がする。しかし，こうなるまで，私の道は長かった。ここに至るまでは，経済学という学問がよく分からなかったし，興味ももてなかった。

私は，以下で，この間の事情を若干物語ろうと思う。それは，決して，経済学に志しながら，あまり成功しなかった一学究の回顧談をしようと言うのではない。これが，同時に，私が，何故，経済哲学あるいは経済学方法論を，今回の研究でとりあげたのか，そして，どのような問題提起をしようとしているのかを，明らかにできると信ずるからである。

私が，二十数年の長きにわたって経済学という学問領域に跼蹐しながら，つい最近に至るまで，経済学の何であるかを理解しなかったと告白することは，己れの恥を外にさらす他の何ものでもない。しかし，私が，この告白を敢えてなすのは，このことの責任は，全てが私に帰せられるべきではなく，わが国における経済学の研究や教育にも責任の幾分かは帰せられるように思えてならないからである。私は，以下で，その理由を述べたいと思うが，それは，わが身の弁護のためではなくこれから経済学を志す若い学究のためでもある。

私は，もとより，有能な学徒ではなかったが，それでも，大学時代にはサミュエルソンの「経済学」，ボールディングの「経済分析」，大学院時代にはハンセンの「景気循環と国民所得」などを，多少の興味をもちながら教わった。勿論，諸先生方の講義をも聴講した。理解の困難なことが多かったが，多少苦労すれば理解できることも少なからずあったように思う。一例を示せば，サミュエルソンがあげている，水は使用価値は高いが交換価値は低く，逆に，ダイヤモンドは交換価値は高いが使用価値は低いという「価値のパラドックス」の問題なども，ものの価値は，その最初の効用によってではなく，その最後の効用によって決まるというように，限界効用の理論を使えばきれいに解けるのだということは，はじめは分かりにくかったが，徐々に分かるようになった。

しかし，私には，経済学の「理論」一般について，どうしても釈然としない一つの問題があった。この問題は，何かの「理論」を私が理解した後で，きまって私を襲って来たように思われる。それは，「理論」の中味を多少苦労をした後で私が理解したとすると，その次に必ず，このようなことが分かったからとて何になるのか？と思ってしまうことであった。先の例で言え

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

ば，「価値のパラドックス」を解く「理論」が分かったからとて，それが何になるのか？とすぐ思ってしまうことであった。数学というような学問であれば，ある問題があって，その解法が分かれば，それで全てが終ってしまうのかもしれない。しかし，経済学という学問では，ある「理論」があって，この「理論」の中味が分かってしまえば，それで全てが終りというようなものであるか？　ここのところが，私には，疑問であった。その当時，ある経済学者が，日本には経済学はない，あるのは経済学学だけであると発言されたことがあるが，この意見には私も強くひかれるものを感じた。それは，私に，以上の疑問があったからである。

私が大学院に入り，故酒枝義旗教授の指導の下に，ワルター・オイケンの経済学を研究しはじめた時，オイケン経済学の中で最も魅力的であったのは，以下のことであった。それは，オイケンが，フランスの歴史学者イポリート・テーヌを引用し，現代人は，現実に対する「直観」（Anschauung）と「問い」（Frage）への能力を失なっていると断言し，この両者を，経済学研究の方法論的出発点としていることであった。オイケンの比喩によれば，現代人の学問研究は ── 特に，社会科学は ──「大地」（歴史的社会的現実）を研究せず，「地図」（理論，歴史，統計）を研究しているという批判であった。当時，「理論」をいくらやっても，それだけではすこしも「現実」が分かったことにはならないのではないか？という疑問に苦しんでいた私にとっては，この疑問を解決してくれるものが，オイケン経済学にあるのではないかと思われた。今，あの頃をふりかえって見ると，私が，経済学の「理論」に暗黙のうちに求めていたものは，「現実」を生き生きと見通すことのできる「窓」のようなものではなかったかと思う。ところが，その当時の私にとって，それは勿論，私のあらゆる面での未熟さによるものであったのだが，「理論」は全くその逆で，「現実」への見通しを遮断する「壁」のようなものであった。私が，「理論」に近づけば近づくほど，「現実」への目は開かれるどころか，逆に，閉じられる一方のようであった。オイケンの比喩によれば，私が「地図」を学べば学ぶほど，「大地」への視界は開かれるどころか，閉ざされる一方のようであった。

私は，今，どうしてこのような陥穽に陥ったのか，その理由が少しは分かるような気がする。根本的には，私が，「理論」というものが全く分かっていなかったことによるが，その責任の幾分かは，やはり，わが国における経済学の研究と教育とによるものと思われる。まず，私が，わが国の経済学の研究と教育の欠点として指摘したいことは，以下のことである。それは，わが国の経済学の研究と教育には，「理論」と「現実」との間に，充分な対応関係が配慮されていないように思われることである。(1) 例えば，スミスの経済学であれば，これは，分業と交換とが発達しようとしている時代の「現実」を背景に，この「現実」を説明するための「理論」であったはずである。マルクスの経済学であれば，産業の発達にともなって富める者と貧しき者とに社会が分裂して行く時代の「現実」を背景にして，この「現実」を説明せんとする「理論」であったはずである。ケインズの経済学であれば，資本も労働も遊休状態にありながら，経済的活動が再開しない不況時代の「現実」を背景にした「理論」であったはずである。このように，「理論」は元来，それ自体（an sich）として存在するものでも，また研究されるべきものでもなく，必ず，これが固く結びつけられている「現実」と，向自（für sich）して存在し，また研究されるべきものと思われる。ところが，わが国の文化一般と同様，経済学もまた，ヨーロッパからの輸入品であるわが国においては，経済学においても，「現実」から切り離された「理論」の移入が計られてきたように思う。この結果，未熟な私のような学徒において，「理論」

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

の研究が「現実」への展望を開くどころか，却って，これを閉ざすようになったのだと思う。このことに関連して，わが国の文化移入一般に，このような現象が生じた理由に，近代ヨーロッパで主流を形成している「理論」は「理論」，「現実」は「現実」という固有の思惟が影響を及ぼしていると思うが，この点は詳述しないことにする。

私が，「理論」の正しい理解に失敗したのは，「理論」と「現実」の対応関係を視野の中に収められなかったという理由の他に，もう一つの理由があったように思う。この点に気付いたのは，大学院を卒業してから数年も経った後のことであった。私は，ある同僚の討論者として，学会での発表に参加したことがあった。[(2)] 報告者の発表は，ミルトン・フリードマンの経済学方法論に関するものであった。私は，報告者がとりあげたフリードマンの論文を何度か読みかえすうちに，「理論」に占める仮定の重要さということに目が開かれた。フリードマンはガリレオの加速度の原理を例にひいて，ガリレオが加速度を一定と仮定したことが — というのは，落体の速度は，速くなったり遅くなったりするのではなく，一定の速度の増分で加速されていく — $S=\frac{1}{2}gt^2$ という加速度方程式の構成にとって決定的に重要であると説明してあった。このフリードマンの説明によって，私は，はじめて，「理論」というものの，カント的表現を用いれば，超越的 transzendental な性格を理解した。私は，これまで，「理論」というものが，よく分からなかった。今にして思えば，私が，「理論」に馴じめなかったのは，私が要するに，「理論」というものがどのようにして発見ないし，構成されるのか，その過程を知らなかったからである。私は，「理論」が構成されるカラクリを，フリードマンの加速度原理の説明によって，ようやく理解した。私は，それまで，経済学において，「理論」をやるためには，数学が分からなければ駄目だと思いこんでいた。数学ができない限り，「理論」はやれないと諦めていた。かと言って，「理論」を完全に放棄することもできなかった。「理論」は分からないながらも，「理論」の経済学における重要性を否定する勇気もなかった。私は，いわば，苦悩しつつ時を過してきた。この間，私の周辺で，経済学に志をもちながら，私と同じように，この「理論」の障害を超えられず，あるいは経済史の研究に移り，あるいは，新聞，雑誌，統計の情報整理によって経済評論を行う方向に活路を求めて行った同僚も居たのではないかと思われる。

私の場合には，いずれに方向転換する勇気もなく時を過ごしている間に，今は，私なりに，「理論」の何であるかを理解するようになったと思っている。「理論」というのは，難波田春夫教授のたくみな比喩によれば，眼鏡のようなもので，これをかけると，もの（「現実」）がよく見える，という意味が，その通りに理解できるようになった。このことは，私の場合に，それだけで終らなかったように思う。何故ならば，私は，もし，「理論」が認識主体によって「現実」を理解するために措定する眼鏡のようなものであるならば，私にも，「理論」の作成が可能なはずだと思うようになったからである。何も，外国の既成の「理論」を苦心して研究するだけで，いわば経済学学をやって一生を終える必要はない。私にも，自由に，私の欲する「現実」の理解のために，私なりの「理論」の構成が可能なはずだと，私は思うようになった。私は，先に，この頃になってようやく，経済学という学問がどのようなものであり，「理論」や「歴史」が分かるようになって来たと述べて来た。このような転機 — 私にとっては，長い学問的苦悩からの脱却の — は，おおよそこのような経緯で訪れたと思っている。

かくして，私は，今は，「理論」を「窓」として，「現実」のより明るい見通しをえる術を

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

知るようになった。かつてのように，「理論」が「現実」への見通しを妨げる「壁」ではなくなった。この結果，既成の「理論」にとらわれることなく，「現実」をよりよく見通せる「理論」を，自からも作成するし，既成のものも利用すればよいと思うようになった。同じ「理論」と言っても，函数論的理論もあれば，形態論的理論もあるというように，理論の区別もつけれるようになった。今は，どのような理論にも，私のこのような視点から，その内容の理解が困難なものについても，整理をしながら，内容の理解をつければよいと思うようになった。かつての理論恐怖症から解放されたように思っている。

私は，かくして，「理論」を媒介にした「現実」の理解という経済学方法論を完全に理解しえたと思っている。しかし，ここに至るまで，私は，すでに論及したように，「理論」から「現実」の突破という「理論」の有効利用の方法に，一度は完全に失敗した。この結果，私は，無意識のうちに，「理論」から「現実」という方向をとらない経済学を模索して来たように思う。私の，このような要求を，オイケン経済学は幾分かは満たしてくれたように思う。同じように，難波田経済学も，私の要求を満たしてくれるものであった。更に，私は，酒枝義旗教授がライフ・ワークとされたゴットル経済学にも，同じ要求をもって研究して来たように思っている。私は，このような研究の過程を経て，経済学の研究方法には，根本的に対立する二つの方法論があるのではないかと思うようになった。この対立とは，一つの方法論が，「現実」の間接的な認識しか認めないのに対して，もう一つの方法論は，「現実」の直接的な把握を求めている点にあると思っている。私は，このような視点から，経済学を方法論の上から，大きく二分し，更に，その中間の形態を置いて，小さく三分する経済学方法論の関連表を作成してみた。この関連表は，経済社会学会年報[3]に発表してあるので，その詳論は省略するが，私が，今回の「カール・ポパーの経済学方法論」と題する研究においてやりたいことは，ポパーの方法論に照らして，私の関連表が，どの程度，検証に耐えれるものかを検討することである。ポパーの「批判的合理主義」（kritischer Rationalismus）という方法論は，私の関連表では，「形態論的経済学」に近いと思うが，この点を，以下の論述で明らかにしてみたい。合わせて，ポパーは，私の関連表にある「実在論的経済学」は，完全に排除しようとするが，その理由を明らかにしてみたい。最後に，私は，ポパーの排除する，「実在論的経済学」の学問としての可能性を信ずる一人である故に，その理由をも明らかにしてみたい。

経済学方法論の関連表[4]

二分法	三分法	代表的学者
認識論	函数論的経済学	ベーム・バウェルク
	形態論的経済学	マックス・ウェーバー
存在論	実在論的経済学	オットリリエンフェルト・ゴットル

二、ポパーの科学哲学

― Essentialismus の批判 ―

私の主たる関心事は，ポパーの経済学方法論であるが，これを明らかにする前に，私は，ポパー哲学の形成過程の順序に従って，まず，ポパーの科学哲学を，次に，ポパーの科学方法論

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

を，終りに，ポパーの経済学方法論を論ずることにする。更に，私は，ポパーの科学哲学は「本質論」（Essentialismus）の批判を，ポパーの科学方法論は「実証主義」（Positivismus）の批判を，ポパーの経済学方法論は「歴史主義」（Historizismus）の批判を含意していると思うので，この点をも合わせて明らかにしてみたい。

ポパーは，混迷する ── 哲学固有の問題と方法を探りあぐねている ── 現代哲学の現状を分析し，現代の哲学を，「実証主義哲学」（der moderne Positivismus）[5]と，「世界観哲学」（die moderne Weltanschauungsphilosophie）[6]とに二分する。前者の代表者には，ラッセル，ウィトゲンシュタイン，カルナップをあげ，後者の代表者には，シェーラー，ハイデッガー，ヤスパースをあげている。この上で，ポパー自からは，今日のより一般的な用語で言えば，実証主義にも実存主義にも属さない，第三の立場を主張しているように思われる。ポパーの現代哲学に占める位置づけについては，様々の議論がありうると思うが，ポパーがラッセル，サルトル，ヤスパース，ハイデッガー，アドルノー，ブロッホなどと並んで，わが国の哲学研究においても，最も注目を集めている哲学者の一人であることは，間違いないことと思われる。この点は，ポパーの著書が，数多くわが国でも翻訳され出版されている事実からも充分に察せられることである。

ところで，わが国で翻訳されているポパーの著書の中には，私の知る限り，まだ翻訳されていない重要な著書が一つある。「認識論の二つの根本問題」（Die beiden Grundprobleme der Erkenntnistheorie, 1979）と題する著書がこれであるが，私は，この著書に触れることから，以下の論述をはじめることにしたい。まず，この著書について，ポパーが自から記している小文を紹介してみよう。「わたしは，『認識論の二つの根本問題』と題する大冊の原稿をたずさえてチロルに赴いた。それは今なお公刊されていないけれども，英訳がいつかは出るかもしれない。その一部は，非常に短縮された形で，のちにわたくしの『探求の論理』に収録された。二つの問題とは帰納問題と境界設定 ── 科学と形而上学とを分かつ境界を設けること ── の問題であった。」[7]

以上の文中で，ポパーはこの著書「認識論の二つの根本問題」における二つの問題とは，「帰納問題」（Induktionsproblem）[8]と，「境界問題」（Abgrenzungsproblem）[9]であると述べている。前者を，ヒュームが提起した問題という意味で，ヒューム問題，後者を，カントが提起したという意味で，カント問題とも呼んでいる。私は，ポパーの哲学体系を，一応，「科学哲学」と「科学方法論」と「経済学方法論」とに分けておいたが，ポパーのあげた「認識論の二つの根本問題」との関係で言うと，「科学哲学」の中心テーマは，「境界問題」であり，「科学方法論」の中心テーマは，「帰納問題」であると言える。従って，私は，以下の論述において，ポパーの科学哲学を説明すると同時に，ポパーの提示した「境界問題」の解決方法をも説明しようと思う。私は，まず，私なりにポパーの科学哲学の位置づけをすることからはじめ，次に，「境界問題」をめぐるカントとポパーの相違点を指摘し，終りに，ポパーの当該問題に対する解決方法を論じておきたい。ポパーの科学哲学の位置づけからはじめると，私は，ポパーの科学哲学は，以下に示す哲学の「三分法」（Tricho－tomie）[10]の中に位置づけるのがよいと思っている。

① 「存在論」（Ontologie）

私は，哲学が，存在の可能性（存在の有無）を問題にする時，これを「存在論」と名づけるのが適当であると思っている。ポパーは，哲学のこの方向を，「本質論」（Essentialismus）と

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

称して排除する。この方向の哲学は，ポパーの表現に従えば「実在」(reality) と「現象」(appearance) の関係を問題にする。

② 「認識論」(Epistemologie)

私は，哲学が，認識の可能性（存在の如何）を問題にする時，これを「認識論」と名づけるのが適当であると思っている。この方向の哲学は，これもポパーの表現に従えば，「経験」(experience) と「理性」(reason) との関係を問題にする。

③ 「価値論」(Wertologie)

私は，真理の可能性（認識の当否）を問題にする時，これを「価値論」と名づけるのが適当であると思っている。更に，私は，ポパーの科学哲学は，この「価値論」の中に位置づけるのが適当であると思っている。何故なら，ポパーの科学哲学は，何よりも，知識なり，認識なり，理論なりの，妥当性，真理性，信頼性 ── あまり，日常性のない用語で言えば真理価 ── を問題にしているからである。「認識論」は，もっぱら，認識の可能性一般を問題にする。認識は，理論を先験的に a priori に措定することによって可能かどうかを問題にする。しかし，「価値論」は，これに対して，認識の可能性ではなく，真理の可能性を問題にする。それが，いかなる過程を経て構成されたかは問題にせず，一旦，構成された理論の，妥当性，真理性，信頼性を問題にする。このため，この方向の哲学では，理論の検証 ── 経験に照らしての ── が最も重視される。ポパーが提唱しているように，この方向の哲学では，「仮設」(Hypothesierung) と反証」(Falsifizierung) の関係が問題とされる。ポパーは，この科学方法論を，「試行」(trial) と「錯誤」(error)，「推測」(conjucture) と「反駁」(refutation) などと様々な表現で説明している。いずれにせよ，ポパーの科学哲学は，以上の理由によって，「価値論」に分類されるのが最も適当であると思われる。

以上，私は，哲学の「三分法」によって，ポパーの科学哲学が，どうして「価値論」に分類されるか，その理由を概略明らかにしえたと思う。ところで，私が，ここにあげた哲学の「三分法」は，後年，ポパーが行なった世界の「三分法」に酷似するところがある。私は，その点にも若干触れてみたい。この点に触れれば，「境界問題」をめぐるカントとポパーの論点の相違も明らかになると思う。それだけでなく，私の年来の問題である「存在論」の問題 ── ポパーの言う「本質論」の問題 ── について，カントとポパーが共通して排斥する「存在論」とはどういうことかの概要をも示せると思う。

ポパーの言う世界の「三分法」とは何かを，ポパー自からの言葉によって紹介してみよう。「『事物』 ── 物的対象 ── の世界を第一の世界と呼び，思考過程のような主観的経験の世界を第二の世界と呼ぶとすれば，言明それ自体の世界は第三の世界と呼べよう。(私は今ではこれら三つの世界をむしろ『世界１』，『世界２』，『世界３』と呼んだ方がいいと思っている。)[11]」

ポパーは，「世界１」(world 1)，「世界２」(world 2)，「世界３」(world 3) の区別を，次のような比喩によって説明しているので，これも合せて紹介しておこう。例えば，我々が，ある熟知する絵画を想起する時，我々が次のような三つの世界を通過すると言う。まず，「現実の絵画」(the real picture) の世界，次に，「想起の過程」(the process of imagining) の

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

世界，そして，「想起された絵画」（the imagined picture）の世界であると言う。[12] 以上三つの世界が，「世界１」，「世界２」，「世界３」に相当することは言うまでもない。私の先に示した区分によれば，「現実の絵画」を問題にするのは「存在論」，「想起の過程」を問題にするのは「認識論」，「想起された絵画」を問題にするのは「価値論」となると思う。以上の関係を，別の比喩で示すと，ポパーの言う「現実の絵画」は「被写体」，「想起の過程」は「写真機」，「想起された絵画」は「写真」と言ってもよいと思う。今，これらの関係を，図示すれば以下のようになるであろう。

対象 ── 認識 ── 検証の関連表

ポパーの分類	世界１	世界２	世界３
私の分類	存在論	認識論	価値論
撮影による分類	被写体	写真機	写真

ところで，この世界の「三分法」を利用すると，ポパーの科学哲学の何であるかは，極めて簡単に説明がつく。それを総括的に表現すれば，ポパーの科学哲学は，「世界１」，私の言う「存在論」，カントの言う「物それ自体」（Dinge an sich）の世界については，必要最少限度にしか論及しない。これには，ほぼ，不可知論的立場をとる。「世界２」，私の言う「認識論」，カントの言う「純粋理性」（reine Vernunft）の世界についても，仮設なり，推測なり，前提なりを構成する程度においてのみ重視するにすぎない。そして，「世界３」，私の言う「価値論」の世界についてのみ，これが仮設，推測，前提，理論，法則，予言などを，経験，事実，実験，観測，測定，証言などによって反証し，検証し，立証する世界として，同時に，妥当性のある，真理性のある，信頼性のある知識の形成の世界として，最も重視するものである。

こう見ると，「境界問題」をめぐるカントと，ポパーの論点が，カントの「世界２」の重視に対して，ポパーの「世界３」の重視の相違によって起ってくることがよくわかると思う。しかし，ここで特に注意されるべきことは，カントもポパーも共通して，「世界１」の問題に真向から取り組もうとしていないことである。両者ともに，カントは，「世界１」は理性の限界を超えるとし，ポパーは，反証の限界を超えるとして，この「世界１」の問題を遠ざけている。このような「世界１」を敬遠する立場を批判するのが，現代哲学における「生の哲学」（Lebensphilosophie），「実存哲学」（Existentialismus），「現象学派」（Phänomenologie）の流れであることは言うまでもない。私は，この問題には，これ以上立入る必要はないと思う。ただ，これによって，私の言う「存在論」と「認識論」の対立の構図を若干明らかにしえたと思う。

以下，「境界問題」について，もうすこし，説明しておきたい。「境界問題」というのは，これを最初に発見したのはカントである，とポパーは言っている。[13] 従って，この問題をポパーは，カント問題とも名づけている。ところで，ポパーは，カントも自分も同じく，「経験科学」（empirische Wissenschaft）と「形而上学」（Metaphysik）の間にある「境界」（Abgrenzung）を問題にしていると言っているが，私は，このように言ったのでは，問題の所在が見えにくくなるのではないかと思う。「経験科学」と「形而上学」との間の境界を問題にするというのは，これはあくまでもポパーの言う「境界問題」であって，カントの境界というのは，「存在」と

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

「認識」との間のものと言う方が分かりやすいと思う。周知のように，カントの観念論においては，認識が可能となるのは，常に，「存在」と「認識」との間に，範疇 Kategorie が設定されることによるとされている。このために，「存在」そのものを，カントの言う「物それ自体」(Dinge an sich) を認識することは，人間の理性を超えているとされている。これによって明らかなように，カントにおける認識の「境界問題」とは，単に，理性の限界を指しているにすぎなかったと思う。人間の認識が，理性によってなされる限り，その認識は，間接的 formal でしかありえず，直接的 material ではありえないというのが，カントの「境界問題」の示す結論であった。

これに対して，ポパーの「境界問題」は，科学 ── 特に，自然科学 ── の圧倒的な発達を背景にして出されて来た問題であると思う。ここに起って来た問題というのは，本当に，科学の名に値する知識や，認識や，理論を，いかにして科学の名に値しないこれらのものと区分するかということであった。この問題については，経験に基づかないすべての知識，認識，理論を，科学の名に値しないものとして，これを哲学の中へと追いやる「境界問題」についての解決方法が，ウィトゲンシュタインなどの「実証主義」(Positivismus) によって示されていた。ポパーの科学哲学は，このような実証主義の，具体的な科学 ── 特に，自然科学 ── 重視，抽象的な哲学軽視という方向を批判した。そして，「反証」(Falsifikation) という科学方法論を基準にすることによって，反証の可能な学問としての「経験科学」，反証は可能でないが，「経験科学」に仮説を提供する学問としての「形而上学」を，それぞれ肯定的に確立するものであった。

以上，認識の「境界問題」について説明したことを整理すれば，「境界問題」についての基準は，カントにおいては「理性」，ウィトゲンシュタインにおいては「経験」，ポパーにおいては両者を総合して，「仮設と反証」ということになると思う。

三、ポパーの科学方法論

── Positivismus の批判 ──

すでに論及したように，ポパーは，人間の認識のもつ限界という問題 ──「境界問題」(Abgrenzungsproblem) ── を最初に発見したのは，カントであると言っている。何故なら，カントがはじめて，人間の認識の限界を，認識における理性の限界ということで問題にしたからである。カントは，この問題を，ポパーの表現で言えば，理性は，「世界２」にのみとどまるべきで，「世界１」にはいりこむべきではないという形で解決した。別の表現をすれば，理性は，「観念の世界」(「世界２」) にその限界があり，「実在の世界」(「世界１」) へと飛躍すべきではないということになる。

このようなカントの境界設定に対して，カントのように人間の認識における理性の限界という形ではなく，人間の認識における経験の限界という形で問題を提起したのがヒュームであった。ヒュームの提起した，人間の認識における経験の限界という問題が，結局，ポパーの言う，認識論における二つの根本問題の一つ，「帰納問題」(Induktionsproblem) と言える。以下において，ポパーの言う「帰納問題」とは何かを，ポパー自からの言葉によって紹介してみよう。次の小文は，ポパーの主著「科学的発見の論理」からのものである。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

「ヒュームは次のように論じる。『諸対象の定常的な結びつき（conjunction）が頻繁に観察された後においてさえ，われわれはすでに経験した諸対象をこえるいかなる対象に関しても，なんらの推論を引き出す理由をもたない。』もし誰かが，われわれの経験は観察された対象から観察される対象への推論を可能にさせると主張したとすれば，とヒュームは言う，『なぜこの経験からわれわれはすでに経験した諸事例をこえるなんらかの結論をくだすのかという私の疑問を繰り返すであろう。』いいかえると，ヒュームは，彼の『要約』において付言しているように，いまだ経験せざる事例に関するなんらかの結論 ── 単なる確からしい結論でさえ ── を正当化するために経験に訴えるとすれば，われわれは無限後退（endless regress ── 筆者註 ── ）におちいってしまうと指摘するのである。[14]」

以上，ヒュームの論述は，わかりにくい点もあると思うが，結局，過去の経験を根拠にして，果して，未来の経験の必然性を結論することが可能であるか？ということを問題にしたと言える。「歴史はくりかえす。」という言葉があるが，これと同じように，経験は，必然的に，反復することが証明されるならば，過去における経験が，未来において反復することが結論されることであろう。例えば，経験は反復するという命題が証明ずみであるならば，過去において日が昇るのが見られたという経験は，未来においても日が昇るのが見られるであろうという経験を，必然的に，結論づけさせることになる。しかし，問題は，経験は反復するという命題をどのようにして証明するかということである。この命題の証明を，もし，経験のみによって行なおうとすると，上の例で言えば，我々が，未来において ── 例えば，明朝 ── 日が昇るのが見られるであろうとする経験の根拠は，過去における ── 例えば，今朝 ── 日が昇るのが見られたという経験に求められることになる。更に，今朝の経験の根拠はと言えば，昨朝の経験に求められることになる。もし，我々が，「日が昇るのが見られる」という経験の反復を完全に証明しようとすれば，我々は，証明の根拠を求めて，無限の過去へと経験をさかのぼらなければならない。これは，一言で言えば，実行の不可能なことである。

ヒュームは，以上のような理由によって，過去の経験を根拠にして，未来の経験の必然性を結論することの可能性をつよく疑う見解を示した。ヒュームの示したこの見解は，単に，経験の限界の認識ということにとどまらず，「経験主義」（Empirismus）が，真理発見の方法として受容してきた「帰納法」という方法論の妥当性をも疑わしめるものであった。ヒュームの懐疑論が重大であるのはこのためである。この点について，若干の説明を付記しておこう。

すでに周知のように，中世から近代への転換期において，西欧哲学では，真理発見の源泉として神よりの「恩寵の光」が放棄され，これに代るに「自然の光」が承認された。「自然の光」とは，西欧哲学においては，人間の認識における理性にその光を求める者と，経験にその光を求める者と，二つの方向が分かれることになった。「自然の光」を，理性に求める方向は，デカルトを祖とする「合理主義」（Rationalismus），経験に求める方向は，ベーコンを祖とする「経験主義」（Empirismus）であった。更に，「合理主義」が，真理発見の方法としたのは，「演繹法」（Deduktion）であり，「経験主義」が真理発見の方法としたのは「帰納法」（Induktion）であった。

デカルトは，周知のように，理性による「方法論的懐疑」[15]（systematic doubt）は人間についに疑いえざる真理を発見させることを知り，この自明の真理を前提にして，結論を導出する「演繹法」を真理発見の方法として受容した。デカルトはポパーの表現で言えば，「先験的な

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

分析判断」(analytisches Urteil a priori)[16] ― 経験を離れた観念的判断― という方法論を確立したと言える。これに対して，ベーコンは，これも周知のように，人間が己れの心中から偶像 Idols ―日本流に言えば，雑念 ―を払い清めれば，自然の法則を明鏡止水のように映しとることを知り，ベーコンの言う「自然の解釈」(Interpretatio naturae)[17] によって，経験から法則を導出する「帰納法」を，真理発見の方法として受容した。ベーコンは，このようにして，同じくポパーの表現で言えば，「後験的な総合判断」(synthetisches Urteil a posteriori)[18]―経験を基にした実在的判断―という方法論を確立した。

しかし，ヒュームの懐疑論は，このようにして，ベーコン以来受容されてきた真理発見の方法としての「帰納法」を，つよく疑わしめるものであった。何故なら，ヒュームに従えば，経験から法則は導出されないことになるからである，その意味することは，経験はあくまでも経験であって，同じく，法則はあくまでも法則である，ということになる。従って，両者の関係は断ち切られることになる。この結果，ヒュームの経験主義によるならば，人間の認識における経験は，あくまでも，経験がこれを定立する「事実の世界」にとどまるべきであって，「法則の世界」にまで入りこむべきではないということになる。カントが，理性の限界を，「観念の世界」と「実在の世界」の間においたように，ヒュームは経験の限界を，「事実の世界」と「法則の世界」の間においたと言えよう。これをポパーの表現にあてはめると，カントが理性に向って「世界２」(「観念の世界」) にとどまり，「世界１」(「実在の世界」) へと入るなと命じたように，ヒュームは逆に経験に向って，「世界１」(「事実の世界」) にとどまり，「世界２」(「法則の世界」) へと入りこむなと命じたと言える。

このように見てくると，現代の「実証主義」(Positivismus) は，まさに，ヒュームが開いた懐疑論的経験主義を徹底させたことがよく分かる。何故なら，「実証主義」においては，経験に基づかない命題はすべて，妥当性，真理性，信頼性のないものとして排除されているからである。ウィトゲンシュタインの表現によれば，経験に基づかない命題は，すべて，無意味 (meaningless) ということになる。これは，経験と法則を峻別したヒュームの経験主義を徹底したものと言える。

以下の小文は，ポパーによるウィトゲンシュタインの「実証主義」の説明である。「すべての有意味な命題は『原子命題』の真理関数でなければならない，すなわち単称観察言明に完全に還元可能 (またはそれから導出可能) でなければならない。もし，ある申立てられた言明がそのように還元できないならば，その言明は『無意味』または『形而上学的』であり『エセ言明』である。かくして，形而上学は無意味なナンセンスである。[19]」

このように，ウィトゲンシュタインの「実証主義」では，経験に基づく「経験科学」と，経験を離れた「形而上学」は峻別され，それ自体，意味のあるのは「経験科学」で，「形而上学」はそれ自体としては意味をもたないことになる。しかし，ここで言う意味のある，なしは経験を基準にしてのことであって，経験をはっきりさせることについては，哲学，論理学，数学などの「形而上学」には，それなりの意義のあることは，ウィトゲンシュタインも認めている。これが，「実証主義」が，時に，「論理実証主義」と呼ばれる理由である。このことに関連する小文を，ウィトゲンシュタインの主著「論理哲学論考」(Logisch－philosophische Abhandlung, Tractus Logico－philosophicus, 1961) から少し紹介しておこう。

「４．11　真なる命題の総計が，総ての自然科学 (または自然諸科学の総計) である。４．

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

111 哲学は自然諸科学の一つではない。(「哲学」という語は自然諸科学より上位もしくは下位のものを意味すべきであって，自然諸科学と並んであるものを意味してはならない。) 4．112 哲学の目的は思想の論理的明晰化である。哲学は学説でなく，活動である。哲学的著作は本質的に解明からなる。哲学の結果は『哲学的諸命題』ではなく，諸命題が明晰になることである。— 傍点は筆者 —。」[20]

以上で明らかなように，「実証主義」と言っても，「論理実証主義」と言っても，いずれも，人間の認識における経験の限界は，「事実の世界」にあり，「法則の世界」は関知しないとしている点では，ヒュームの懐疑論的経験主義の線上にある。「実証主義」と，「論理実証主義」とでは，前者が，単に経験によって定立されるのは事実のみと言っているのに対して，後者では，経験によって事実が定立される際に，哲学などの形而上学が，これを明晰にするのに役に立つとしていることに相違があるにすぎない。例えば，日が昇るのが見られたという経験を，経験そのものと，言語の形式によって定められた経験とに分けるならば，「実証主義」は，経験そのものを経験と言うのに対して，「論理実証主義」は，言語の形式によって定められた経験を経験と言っていると見てよい。

いずれにせよ，「実証主義」からは，事実の定立のみで，法則の定立は拒否される。ここからは，事実の学問としての「経験科学」は生まれても，法則の学問としての「経験科学」は生まれてこない。それでは，自然科学の例で言えば，ケプラーの法則も，ニュートンの法則も，アインシュタインの法則もいずれも，無意味な学問ということになる。果して，そうであろうか？ ポパーは，「実証主義」について，この点を問題にする。ポパーも，科学の名に値する知識，命題，理論と，科学の名に値しない知識，命題，理論とは何かを問題にした点においては，「実証主義」と同じ問題意識から出発している。しかし，ウィトゲンシュタインが，科学の名に値するということで，経験に基づくという条件のみを重視したのに対して，ポパーは，経験と共に理性をも重視する方向で，この問題への解決を求めた。

この方向は，「合理主義」と「経験主義」，デカルトとベーコン，「演繹法」と「帰納法」，「分析判断」と「総合判断」，「先験的 a priori」と「後験的 a posteriori」の総合であったと言える。ポパーの定式によれば，「先験的 a priori な総合的判断は可能であるか？」[21]と言うことになる。この問題への解決は，すでに縷説したようにまず，カントによって提出された。カントは，存在と認識との間に，「範疇」(Kategorie) を設定することによって，先験的な総合判断を可能にしようとした。このようにして，カントは，事実を法則によって認識する方法を発見した。但し，カントにとって完全に解決できなかったことは，観念において定立した法則と，実在において予想される法則との斉合性であった。別の表現で言えば，超越的に定立した法則と，内在的に予想される法則との斉合性ということである。カントは，この問題を，経験を定立するのも，法則を定立するのも，ともに，観念における理性なり悟性の規定性によるとして解決しようとした。しかし，これはあまりに観念論にすぎるように思われる。

ポパーは，この問題について，カントのように，人間の認識における理性にあまり重きを置かないような方法で解決を見い出した。ポパーは，カントが存在と認識の間に置いた「範疇」に，きわめて相対的な意味しか認めなかった。ポパーは，カントの範疇に相当するものを仮設と呼んでいるが，この仮設には，経験に照らしての反証を受けるまでという，暫定的な有効性しか認めていない。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

ところで，仮設とは何であろうか？　この点について若干の説明をしておきたい。何故なら，カントの範疇に相当する仮設について，ポパーは詳しい説明をしているからである。ポパーの科学方法論は，「仮設と反証」につきるのであるが，特に，この仮設の構成について見るべきものがあると思う。(22)

仮設というものは，実は，きわめて簡単に作られるものである。その作法を，以下で概説してみよう。仮設は，「三段論法」（Syllogismus）を正しく理解すれば，誰にでも作成が可能である。三段論法と言えば，誰でも知っているように，大前提，小前提，結論によって成り立っている。古典的な例で示せば，「人間はすべて死ぬ」（大前提），「ソクラテスは人間である。」（小前提），「従って，ソクラテスも死ぬ。」（結論）という構造になっている。しばしば，大前提は，言うまでもないので省略される。すると，三段論法は，前提と結論によって構成されることになる。上の例で示すと，「ソクラテスは人間である。」（前提）から，「従って，ソクラテスも死ぬ。」（結論）が導出される。デカルトが，真理発見の方法として受容した「演繹法」と言っても，実は，これだけのものであった。もっと一般的に言えば，前提を置くと結論は，ひとりでに導出される。同じことを，私が，先に，ブリードマンの経済学方法論に関して紹介した落体の法則で言えば，次のようになる。もし，物体の速度は一定の増分で加速するという前提を置くと，$S=\frac{1}{2}gt^2$ という結論は，ひとりでに導出される。逆に言えば，$S=\frac{1}{2}gt^2$ という速度で物体が落下するということは，この物体は，一定の増分で加速されて落下していることを意味することになる。いわば，前提と結論との間には，同義反復 tautologisch な関係がある。要するに，一方のことが言えるのなら，他方のことも当然言えるという関係である。

経済学の中から，二，三の例をあげてみよう。ベーム・バウェルクの言うように，「限界生産力は逓減する。」という前提を置けば，「資本の蓄積にともない利子率は低下する。」という結論が導出される。あるいは，ケインズが言うように，「限界消費性向は逓減する。」という前提を置けば，同じように，「所得が増大するにつれて，投資の所得を増大させる効果は減少する。」という結論が導出される。あるいは，マルクスの言うように，「階級間の利害は対立する。」という前提を置けば，「人類の歴史は階級闘争の歴史である。」という結論が導出される。おそらく，このような前提と結論によって導出された仮設の実例は数多く見い出されるであろう。このことは，三段論法のこのような用法に通じた者にとっては何の造作もなくなしうることである。原理的に，仮設は，前提から導出される結論として無限に作成が可能である。しかし，すべての仮設が承認されるのではない。自から，承認されるべき仮設と，排除されるべき仮設がある。ポパーの科学方法論は，仮設をいかにして作り出すかによって，仮設の価値を決めようというのではなく，仮設がどの程度反証に耐えうるかによってその価値を決めようというところに特色がある。このような意味において，私は，ポパーの科学哲学（あるいは，科学方法論）を，認識論とは呼ばず，価値論と呼ぶのが適当であると思っている。

四、ポパーの経済学方法論
― Historizismus の批判 ―

ポパーの主たる関心事は，経験科学，しかも，社会科学にではなく自然科学にあった。更に，同じ自然科学といっても，ウィトゲンシュタインのように，これを事実の学問としてではなく，法則の学問として見ることに関心を示していた。従って，ポパーにとっては，ケプラーの

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

法則や，アインシュタインの法則などが，主な関心事であった。ウィトゲンシュタインのように，事実を事実としてではなく，事実を法則によって認識することを，ポパーは問題にした。しかも，このような認識を可能にする条件を，デカルトやベーコンのように，「方法論的懐疑」とか「自然の解釈」に見るような人間の心の状態といった心理学によらず，「仮設と反証」といった論理学によって明らかにしようとした。

ポパーによるこのような科学方法論は，今日，自然科学の方法論として広くとり入れられているように思われる。[23] 従来の，単なる「演繹法」や「帰納法」に代わって，ポパーの両者を総合した「仮設と反証」が方法論としては，すぐれていると認められたからだと思う。

ポパーの科学方法論は，今まで論述してきたことから明らかなように，前提を置き結論を出す仮設設定の部分 ── ほぼ，「演繹法」に相当する ── と，仮設を，実験，観測，測定などの経験によって検証（あるいは，反証）する部分 ── ほぼ，「帰納法」に相当する ── の二つの部分から構成されている。ポパー自からの表現によれば，これは「演繹的，経験的方法」(deduktivistische–empiristische Methode)[24] となる。このような方法論であるため，これが，特に，実験，観測，測定が厳密に実行可能である自然科学の方法論として採用しやすいことは言うまでもない。ところが，ポパーは，この科学方法論を，自然科学に限定せず，社会科学をも含めた経験科学一般にも真理発見の方法として採用すべきであると提案する。ポパーが，何故，このような科学方法論の普遍妥当性を主張するのか，その理由は，実は簡単なことである。要は，ポパーが，認識の対象，ポパーの言う「世界１」，私の言う「存在」には深入りしないからである。「世界１」（あるいは，「存在」）は，斉合性が期待される自然現象と，斉合性が期待されない社会現象（あるいは歴史現象）とに区別される，といった存在判断が，ポパーにおいては下されていない。この結果，ポパーの科学方法論では，認識の対象の別なく，同一の方法論が適用されることになる。私は，ポパーの存在判断についての問題には，ここでは立入らずに，ポパーの方法論そのものについて，以下で論ずることにする。

ポパーは，その科学方法論を，社会科学に応用することによって，何よりもまず，既成の社会科学の科学方法論を，「歴史主義」(Historizismus) の名称の下に一括して批判する。私は，ポパーが，いかなる点において「歴史主義」を批判するのか，これを明らかにすれば，社会科学にポパーの方法論が応用されるとどのような結果が生ずるかを示せると思う。このような観点から，以下の論述を進めることにする。

① 「開かれた社会」(the open society) から，「閉ざされた社会」(the closed society) を批判する。

ポパーの言う「開かれた社会」とは，批判を最大限度に許す社会を言い，「閉ざされた社会」とは，逆に，批判を最少限度にしか許さない社会を言う。従って，「開かれた社会」とは，自由な社会，「閉ざされた社会」は自由でない社会と言える。あるいは，「開かれた社会」は，個人が中心となる社会，「閉ざされた社会」は，個人を超えた階級とか国家とか超個人的主体が中心となる社会ともえる。私の区分によれば，「開かれた社会」は，ほぼ「契約社会」[25] に相当し，「閉ざされた社会」は「血縁社会」[26] に相当する。

ポパーの区分したように，個人を主体の中心に置く社会を「開かれた社会」，階級なり，国家なりを主体の中心に置く社会を「閉ざされた社会」と言うならば，これを，私の言うイデオロギーの区分に合わせれば，個人を中心に置く「開かれた社会」は，「自由主義」(Libera-

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

lismus）の社会，階級を中心に置く「閉ざされた社会」は，「社会主義」（Sozialismus）の社会，国家を中心に置く「閉ざされた社会」は，「国家主義」（Nationalismus）の社会になる。ポパーも，これに類するイデオロギーの視点から，社会の区分をしていたことは，次にあげるポパーの主著「歴史主義の貧困」に寄せた，ポパーの献辞を見ればよく分かる。「歴史的運命という峻厳な法則を信じたファシストやコミュニストの犠牲となった，あらゆる信条，民族に属する無数の男女への追憶に献ぐ。[27]」この献辞によって，ポパーが，国家や階級という名の下で ── 日本流に言えば，大義名分のために ── 踏みつけられて犠牲になった個人への ── ポパー自からを含めて ── 共感を表明していることは明らかである。

このように言うと，ポパーの「開かれた社会」と「閉ざされた社会」の区分は，感情に基づくもののようにも受け取られかねないが，ポパーの両社会の区分は，実はポパーの科学方法論からの当然の帰結なのである。その理由を概説すれば，次のようになる。ポパーは，すでに度々論述したように，真理発見の方法として，「仮設と反証」という方法を提唱した。ところで，「仮設」は，これもすでに論じたように，原理的に，無限の設定が可能である。従って，「仮設」の妥当性，真理性，信頼性の認定についても，無限の検証が必要となる。「仮設」の自由な設定には，自由な検証が対応しなければならない。何らかの権威の名の下に，仮設設定の自由が犯かされてもならないし，仮設検証の自由が犯かされてもならない。このような意味での，「学問の自由」は，社会的に保証されなければ保証のされようがない。ポパーの言う「科学的客観性」（scientific Objectivity）[28]は，「科学的方法の相互主観性」（the inter－subjectivity of scientific method）[29]がなければ保証されない。従って，ポパーの科学方法論が，その真価を発揮するためには，相互批判を最大限度に許容する社会体制が前提となる。ポパーが，「開かれた社会」を提唱する理由は，以上のように，ポパーの科学方法論による。ポパーの科学方法論は，社会科学に応用されると，単に方法論にとどまらず，体制論にまで発展する。

② 「合理主義」（Rationalismus）から，「歴史主義」（Historizismus）を批判する。

ポパーの言う「歴史主義」は，反自然主義的 anti－naturalistic なものと，自然主義的 pro－naturalistic なものに分けられる。前者は，ヘーゲルをその代表者とし，後者は，マルクスをその代表者とする。ポパーの言う，反自然主義と自然主義は，ほぼ，観念論と唯物論の区分に相当する。このように区分されながら，両者は，「歴史主義」という共通の名称の下に総括されている。ポパーの言う「歴史主義」の系譜は，古代，中世，近代にわたって，ほぼ以下のように描かれる。①ヘラクレイトス，②プラトン，③アリストテレス，④「実在論」（Realismus），⑤ヘーゲル，⑥マルクス。序いでに，ポパーが，「歴史主義」に対立させる「合理主義」の系譜も示しておこう。①デモクリトス，②「唯名論」（Nominalismus），③パスカル，④デカルト，⑤スピノザ，⑥ロック，⑦ヒューム，⑧カント，⑨ミル，⑩ラッセル，以上である。

以上の系譜から明らかなように，ポパーは，「歴史主義」が，古代において，ヘラクレイトス，プラトン，アリストテレスによって形成され，中世の「実在論」を経て，近代において，ヘーゲルに継承されたと見ている。そこで，まず，「歴史主義」が古代において形成された次第を，ヘラクレイトス，プラトン，アリストテレスについて見ることにする。要点は，ヘーゲルに継承された古代の「歴史主義」は，弁証法と実在論になることにある。従って，両者が，いかにしてヘーゲルに受容されたかを明らかにすればよい。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

ポパーは，「歴史主義」の出発点を，「変化」（change）[30]の発見に置いている。この発見は，ヘラクレイトスに帰せられる。ポパーは，ヘラクレイトスが「変化」の最初の発見者となった理由を，その時代が激動する社会の変革期であったことに求めるが，この点に深入りする必要はない。ヘラクレイトスが，「変化」の発見者であったことは，その有名な言葉，「万物は流転しており，何ものも静止していない。[31]」を示せば充分である。しかし，ヘラクレイトスには，万物流転の観念と並んで，対立の観念という重要な発見があった。ヘラクレイトスの言葉を若干引用してみよう。

「冷たいものが温かくなり，温かいものが冷たくなる。湿ったものが乾き，乾いたものが湿る。……対立物は互いに帰属し合い，最善の調和は不一致から生まれ，万物は争いによって展開する。……上り道と下り道とは同じ道である。……神々にとってはすべてのものが美であり善であり正である。しかしながら人間たちはある事物を正，他の事物を不正とした。……善と悪は同一である。[32]」以上の対立の観念によって，ヘラクレイトスは，変化の理由を説明した。対立があるから変化がある。調和のあるところには，変化がない。同時に，発展もない。このようなヘラクレイトスの変化と対立の観念は，ヘーゲルの弁証法に継承された。ヘーゲルの弁証法も，ヘラクレイトスと同じく，対立による変化の論理と言える。ところで，このような「歴史主義」に見られる弁証法 Dialektik は，「合理主義」における矛盾律 Kontradiktion とは相い入れない論理である。[33]何故なら，矛盾律は，同時に A であり nonA であるという命題を，論理の矛盾であるとして斥けるのに対して，弁証法は，同時に A であり nonA であることが，却って，その命題の真理を証明するという論理だからである。矛盾律が，真理は，黒であるか白であるか，いずれによって明らかになると主張するのに対して，弁証法は，真理は，黒であると同時に白でなければならないと主張する。

私は，ここで，いずれの論理が正しいかを論じようとは思わない。これを論じようとすれば，カントの言う「二律背反」（Antinomie）に陥るように思う。弁証法か矛盾律かの対立には，実在論か観念論かによく似た問題があるように思う。カントの言うように，理性の次元では，このような対立を論ずることは，神の有無を論ずるように，結局，「二律背反」に陥る他ない問題のように思われる。[34]私は，ここでは，このような問題を離れて，何故，ポパーが，弁証法を斥け矛盾律を取るのかを論ずることにする。この理由は，実は簡単なことである。これも，その理由を，ポパーの科学方法論に求められる。ポパーの科学方法論においては，「仮設」の設定に重きが置かれていることは，すでに論じて来た。ところで，「仮設」は，前提と結論によって簡単に構成されることも論じてきた。このような「演繹法」が，真理発見の方法として有効なためには，その結論が黒白いずれかであることがはっきりしていることが不可欠の条件である。結論が，黒くもなったり白くもなったりするのでは，「演繹法」は，真理発見の有効な方法とはなりえない。しかし，すでに論じたように，「演繹法」の結論は，前提次第で自由に変わる。従って，前提をいずれかに固定しなければ，結論の黒白が定まらない構造になっている。従って，弁証法のように，黒でもあり白でもある，あるいは，A であると同時に nonAであるという論理を受け入れるならば，前提は，黒とも置けるし白とも置けることになる。Aとも置ければ，nonA とも置けることになる。例えば，先の例で言えば，ソクラテスは人間であるという前提を置けば，ソクラテスは死ぬという結論が導出される。しかし，ソクラテスは人間でない，という前提を置けば，ソクラテスは死なない，という結論が導出されるはずであ

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

る。このように弁証法を前提に導出される結論が，両義的で曖昧なことは言うまでもない。ポパーのように，検証（あるいは反証）によって，命題なり，理論なり，仮設なりの価値を定めようとする方法論にとっては，結論がこのように検証をのがれやすいものであってはならない。これが，ポパーが，弁証法を斥ける理由である。

以上，ヘーゲルが受容した弁証法について説明したので，次に，実在論について説明したい。この点も，元は，ヘラクレイトスの「変化」の発見に関係がある。このことを，以下で説明する。

ヘラクレイトスの「変化」の観念は，プラトンにおいて，「イデア」（idea），あるいは，「形相」（form）の観念を生み出した。プラトンは，ヘラクレイトスの変化の観念を認めつつも，全てが変化するとしたのでは，人間の知識が成り立たないことを発見した。[35] 例えば，政府と言い，国家と言い，都市と言っても，これらがすべて刻々として変化するとしたのでは，一体，政府とは何か，国家とは何かと問われてもはっきりしない。プラトンは，この問題を，変わりゆくと見られる「現象」（appearance）の背後には，変わりゆかない「実在」（reality）が存在するという「イデア」論によって解決しようとした。こうすれば，いかに，例えば，現実の政府や，国家や，都市などが目まぐるしく変化しても，すべては，不変の政府，不変の国家，不変の都市の変形として説明することができるからである。

プラトンの「イデア」，あるいは「形相」は，アリストテレスによって，「究極因」（final cause），あるいは「本質」（essence）として継承された。[36] 但し，アリストテレスは，プラトンのように，これらのものを，歴史から超越したものとしないで，歴史に内在するものとした。[37] これによって，アリストテレスの「本質」論では，あるものの本質は，歴史を見れば自然に知られるものと解釈された。

プラトン，ならびにアリストテレスに見られる実在論は，弁証法と同じように，ヘーゲルに継承された。ヘーゲルの「絶対精神」（absoluter Geist）は，プラトンの「イデア」，アリストテレスの「本質」と同じ性格のものである。ヘーゲルは，アリストテレスと同じように，「絶対精神」を，歴史に内在するものと解釈した。更に，ヘーゲルの「絶対精神」は，正反合という弁証法の論理で展開すると解釈されている点が，アリストテレスと異なる点である。例えば，アリストテレスは，邪悪な国家と真正な国家の本質は，歴史を見れば区別がつくと見るのに対して，ヘーゲルは，真正な国家は，単なる共同から一度自由を経過することを通して実現されると見るところに相違がある。

いずれにせよ，ヘーゲルが，プラトンとアリストテレスから継承した実在論は，「現象」（appearance）の背後に，これを規定する，「実在」（reality）の存在を予想するものであった。しかも，実在論においては，この「実在」が，決して，人間の認識にとって，把捉できないものでなく，把捉できるものとされていることが重要である。プラトンの「イデア」も，アリストテレスの「本質」も，ヘーゲルの「絶対精神」も，見る目のある人には見える実体とされている。しかし，ポパーは，まさに，この実在論を，「本質論」（Essentialismus）と称して，はげしく批判する。ポパーが，弁証法と同じく，実在論を批判する理由も，ポパーの科学方法論にある。その理由を，以下で説明しよう。

すでに論述したように，ポパーの「仮設と反証」による科学方法論では，仮設と並んで，反証の実践に重きが置かれる。先に，弁証法は，仮設の設定を著しく曖昧にすると言ったが，同

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

じように，実在論は，反証の実践を著しく曖昧にする。何故なら，実在論は，ポパーの言う「世界１」，私の言う「存在」を，「現象」と「実在」とに分けるために，ポパーの反証に必要な経験なり，事実なり，証言なりは，必ずしも一義的に明白なものと言えなくなるからである。事実，ポパーは，その「世界１」を，決して，実在論的に，奥深いものにせず，極めて表面的なものにとどめようとしている。ポパーが，「世界１」を，つとめて，感覚的，経験的，実証的に規定しようとするのは，以上の理由からである。

ポパーにとって，「世界１」は，目に見える世界，感覚と経験と，常識の世界であって，ポパーは，これを実在のすべてとする。この背後に，目に見えない，感覚を超えた，別の世界を予想しない。positiv な世界が，すべてであって，その背後に，negativ な世界を予想しない。このような世界については，不可知論的立場をとる。ポパーは，人間の認識 ── それが，理性であれ，経験であれ ── このような世界に入りこめば，神秘主義に陥ると見る。神秘主義は，実証的な検証を超えた世界であるので，従って，見える人には見え，見えない人には見えない世界であるので，独断主義を排除しえない。

すでに論じたように，近代の哲学が，「恩寵の光」から「自然の光」へと，その真理発見の光源を転換した時，ポパーは，神秘主義 mysticism から合理主義 rationalism への転換が計られたと見ている。ポパーにとっては，本質主義を残している「歴史主義」は，いまだに神秘主義を脱していないことになる。このように，ポパーの合理主義は，「世界１」を，あくまでも，感覚的，経験的，実証的に規定することを要求する。別の表現をすれば，実在 reality の規定を，観念的にではなく，物質的にすることを要求する。ポパーが，ヘーゲルの観念論的弁証法よりも，マルクスの唯物論的弁証法に，同じ「歴史主義」に分類しながらも好意を示すのはこのためである。[38] それは，ヘーゲルの命題よりもマルクスの命題の方が，反証の可能性が高いと見るからである。例えば，ヘーゲルのように歴史を自由実現の過程と見れば，これを検証することははなはだ困難である。これに対して，マルクスのように歴史を階級斗争の過程と見れば，まだ検証はしやすいことになる。ポパーが，ヘーゲルを反自然主義，マルクスを自然主義と区別するのも，以上の理由による。

③ 「方法論的個人主義」（methodological individualism）から，「方法論的全体主義」methodological collectivism）を批判する。

ウィトゲンシュタインの「実証主義」は，事実をレンガのようにひとつずつ積み上げて経験科学を構築する。原子論的方法論である。これに比較すると，ポパーのそれは，事実を法則によって包括的に認識しようとするものであるから，まだ，個人的よりも集合的な性格を帯びている。この限りでは，ウィトゲンシュタインに比べれば，ポパーの方が，人間の認識の限界を広くとっているように見える。しかし，ポパーも，人間の認識における限界を，ヒュームやカントと同じくつよく意識していることに変わりはない。従って，ポパーも，人間の認識の限界については厳しい態度を保っている。それは，ポパーがその学問のモットーにしたソクラテスの有名な言葉，「私はいかに知らないかということを知っている。」[39] に示されている。ソクラテスと同じく，ポパーも，人間の知識の限界をつよく意識している。

ポパーが，「歴史主義」に見られる，歴史についての歴史法則，社会についての全体計画に，つよい疑問を示すのはこのためである。ポパーは，歴史法則と全体計画を，いずれも，超自然的，超人間的と見ている。ポパーは，「歴史的社会的現実」を，ありのままに ── 従って，社

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

会の全体と歴史の変化とを同時に ── 認識することは，人間の認識を超えることと判断する。従って，人間が，この巨大な「歴史的社会的現実」を認識する方法は，ただ，部分的な認識を積み重ねるより他にはないと見る。ポパーにとっては，自然法則と言えども，広大な宇宙を，部分的に認識する方法でしかない。このような理由によって，ポパーは，「ピースミール社会工学」(peacemeal social engineering)[40] という方法論を提案する。この方法論の基本原理は，目的 ── 何を？ ── ではなく，手段 ── いかに？ ── を重視することにある。ポパーは，これによって，超自然的歴史法則，超人間的全体計画の設定を回避できると見ている。もし，歴史法則や全体計画が設定されれば，目標は定められ，すべての手段はこの目標に従って調整されるだけである。ポパーは，このような歴史法則や，全体計画が設定されるのは，手段よりも目的を重んずる「目的論」(Teleologie) の応用によると見る。また，「目的論」において手段よりは目的が重視されれば，自由の制限はつよまらざるをえない。これに対して，「目的論」を，目的よりも手段を重んずるように応用する時，自由の制限はゆるやかなはずである。「方法論的全体主義」を回避し，「方法論的個人主義」を実現すれば，自由の余地が広くなると，ポパーは見ている。

ポパーの提唱する「ピースミール社会工学」を，経済政策に応用すると，経済政策は短期的，かつ地域的なものがよりすぐれているという結論になる。もし，「目的論」をポパーのように，目的よりも手段に重点を移して解釈すれば，より実践的，より技術的，より没価値的なものになる。最近の経済政策は，ポパーの方法論の示すように，より短期的，より地域的なものへと進んでいるようにも思われる。これは，ポパーの言う，「方法論的全体主義」から，「方法論的個人主義」への転換が反映されているのかもしれない。しかし，私には，目的のない行動が盲目であるように，長期的，全国的視野をもたない経済政策は，盲目なものに思えてならない。全体計画や長期計画には，自由の制限がつよまることは認められるとしても，部分計画にも，混乱の危険がつきまとっているように思われる。しかし，これは，経済政策の常に問題にされる自由と秩序の調和に帰することに思われる。この問題は，ここまでにとどめることにする。

五、認識論と存在論

私は，先に，自己の拙なき学問遍歴を語った時に，私は，「理論」を介して「現実」に接近する方法論に一度はつまずいた，このため，私は，無意識のうちに，「理論」を介さずに「現実」に接近する方法論を模索してきたと記してきた。この模索の結果として，経済学の方法論には，二つの種類が存在することを知るようになったと記してきた。一つは，「理論」を介して「現実」に接近する方法であり，もう一つは，「理論」を介せずに「現実」に接近する方法である。これを，カントの表現で言えば，間接的 formal にと，直接的 material に接近する方法となる。私の示した経済学方法論の関連表で言えば，認識論と，存在論となる。私は，この関連表を，この「二分法」(Dicho－tomie) に，更に，中間的方法論を置いて，「三分法」(Tricho－tomie) にまで発展させた。そして，この関連表の中で，私が，今，最もつよい関心をもつものは，「存在論」，しかも，その中の「実在論的経済学」である。

私は，ポパーの「科学哲学」，「科学方法論」，「経済学方法論」の論述によってポパーが，いかに厳しく，私の提唱したい「実在論的経済学」を批判しているかを論及してきたつもりである。その理由を，私は，ここで再述しないが，結論は，ポパーによる限り，人間の認識にとっ

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

て，「現実」の直接的 material な認識は完全に否定されている。ポパーにとって肯定されるのは，「現実」の間接的 formal な認識のみである。この点において，ポパーは完全なカント主義者 Kantianer である。

私は，ポパーに教示されたことは多々あるが，「現実」，あるいは私の言う「存在」，ポパーの言う「世界1」を，不可知論的に見るポパーの態度には，承服しがたいものを感じている。私は，これらについて，可知論的に見る態度に同調したい。しかし，「現実」，「世界1」，「存在」の認識が，間接的でなく直接的に可能であるからには，いかなる条件が必要か，この点が明らかにされなければならない。果して，いかなる条件が必要なのか？

この問題に，あくなき探求を重ねてきたのは，すでに周知のように，「生の哲学」（Lebensphilosophie），「現象学派」（Phänomenologie），「実存哲学」（Existentialismus）の諸哲学であった。これらの哲学に共通する観点は，ポパーの言うように，「現象」（appearance）は，「実在」（reality）の顕現と見ることにある。別の表現をすれば，見える世界は，見えない世界[41]の顕現と見る。あるいは，物質世界は精神世界の顕現と見る。これを，一例をもって示せば，人間の行動という目に見える現象の背後には，人間の意志という目に見えない動因が先行しているような場合がわかりやすい。

一見，「実在論」は，目に見える世界を，目に見えない世界によって説明するために，同じく，目に見える現象を，目に見えない法則によって説明する「観念論」と似ているように思われる。しかし，両者には，プラトンのイデアと，カントのイデアとでは，同じイデアと言っても，一方が実在的，他方が観念的であるのと同じ相違がある。譬えて言えば，プラトンが，「現実」を背後から見ようとしているのに対して，カントは，前面から見ようとしている。

いずれにせよ，「現実」を，直接的に認識することを可能にさせる条件は何かが問題である。これについては，フッサール，ハイデッガー，ヤスパースによっていくつかの解答が示されている。フッサールは，「現実」の直接的認識は，直観（Intuition）[42]によって可能であると言った。ハイデッガーは，これを，恐怖（fear）[43]によって可能とした。ヤスパースは，「虚無」（annihilation）[44]によって可能とした。フッサールの直観と言い，ハイデッガーの恐怖と言い，ヤスパースの虚無と言い，いずれも，「現実」の直接的認識を可能にするための条件である。私は，今のところ，このような方法によらないで，「問いかけ」と「語りかけ」によって，「現実」の直接的認識が可能となると思っている。この点は，経済社会学会年報に説明したので詳論はしないが，私は，この方法論を，比喩的に，山に向って声をかけること ―「問いかけ」―と，山からの谺 ―「語りかけ」― と説明した。このような方法論には，ポパーの言うように，神秘主義，独断主義，心理主義の欠点がつきまとう。しかし，私は，もし，「現実」の直接的認識が可能でない限り，経済学のような経験科学においては，いつまでたっても，本質論，価値判断，実在判断が可能にならないと思っている。この点についても，この年報に多少論及したので，ここでは，論じないことにする。以上をもって，私の，ポパー研究の結論としておきたい。

註

(1) 私は，この点に配慮されて書かれた例外的な著作として，難波田春夫「スミス，ヘーゲル，マルクス」（昭和23年　講談社）をあげておきたい。

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

(2) この学会は，第十二回経済社会学会（昭和50年11月）で，発表者は，亜細亜大学　川畑寿氏，発表題目は，「経済の理論と現実」であった。

(3) 鉢野正樹「『認識論』と『存在論』をめぐる一考察」　経済社会学会年報・Ⅷ（昭和60年11月）p. 87.

(4) この関連表は，上記の経済社会年報に発表したものとほぼ同じであるが，若干の修正をしたものである。

(5) Karl R. Popper : Die beiden Grundprobleme der Erkenntnistheorie, 1979, S. 342

(6) a. a. O. S. 343

(7) カール・R. ポパー著　藤本隆志／石垣壽郎／森博訳　「推測と反駁」 484～485頁　（1980年3月　法政大学出版局）

Karl R. Popper, Conjectures and Refutations, p. 254.

(8) a. a. O. S. 4.

(9) a. a. O. S. 4.

(10) 「論理学」の項（吉田夏彦　Japonica　昭和46年　小学館）ここには，哲学を存在論・認識論・価値論の三つに分けることのみが記載されて，詳しい説明はない。

(11) K. ポパー著　森博訳「果しなき探求 ― 知的自伝」259頁（1978年9月　岩波書店）

Karl Popper, Unended Quest, 1976, p. 181.

(12) 同訳書 259頁。

op. cit., p. 181.

(13) a. a. O. S. 386.

(14) カール・R. ポパー　大内義一・森博訳「科学的発見の論理」（下）449頁（1972年7月　恒星社厚生閣）

Karl R. Popper, The Logic of Scientific Discovery, 1934, p. 369.

(15) カール・R. ポパー著　藤本隆志／石垣壽郎／森博訳　「推測と反駁」24頁（1980年3月　法政大学出版局）

Karl R. Popper, Conjectures and Refutations, p. 15.

(16) a. a. O. S. 11

(17) カール・R. ポパー著　藤本隆志／石垣壽郎／森博訳　「推測と反駁」22頁（1980年3月　法政大学出版局）

Karl R. Popper, Conjectures and Refutations, p. 15.

(18) a. a. O. S. 11

(19) カール・R. ポパー　大内義一・森博訳　「科学的発見の論理」（下）382頁（1972年7月　恒星社厚生閣）

Karl R. Popper, The Logic of Scientific Discovery, 1934, p. 313.

(20) 奥雅博訳　「論理哲学論考」（ウィトゲンシュタイン全集1　53頁　1975年4月　大修館書店）

(21) a. a. O. S. 14.

(22) 仮設設定に関する論述は，ポパーの著書でいたるところに散見するが，例えば，前掲書の「認識論における二つの根本問題」の140頁に比較的詳しい説明がある。

(23) 「彼の哲学と思想の刺激と影響とは哲学界をはるかにこえ，人文・社会諸科学の領域のみならず，自然科学，さらに政治の分野にまで及んでいる。ペーター・メダウォー，ジャック・モノー，ジョン・エクルズ，コンラート・ローレンツらのノーベル賞受賞クラスの自然科学者達が揃って自分の仕事へのポパーの思想的貢献に対して公的に謝意を表明し……。」（訳者あとがき。K・ポパー著　森博訳　「果しなき探求 ― 知的自伝」337頁　1978年9月　岩波書店）

(24) a. a. O. S. 16.

(25), (26) 鉢野正樹　「自由主義，社会主義，国家主義」

（「北陸大学紀要」昭和59年87頁）

NII-Electronic Library Service

Hokuriku University

(27) カール・R・ポパー著　久野収・市井三郎訳　「歴史主義の貧困」1頁
Karl Popper, The poverty of Historicism, 1957.

(28), (29) 訳書の「科学的方法の間主観性」を，私は，「科学的方法の相互主観性」と訳しておいた。
カール・R・ポパー　小河原誠・内田詔夫訳　「開かれた社会とその敵」(第二部) 201頁 (1980年6月　未来社)
K. R. Popper, The Open Society And Its Enemies, volume 2, 1945, p. 217.

(30) カール・R・ポパー　内田詔夫・小河原誠訳　「開かれた社会とその敵」(第一部) 30頁　(1980年3月　未来社)
K. R. Popper, The Open Society And Its Enemies, volume 1, 1945, p. 11.

(31) 上掲書31頁。op. cit., p. 12.

(32) 上掲書35頁。op. cit., p. 16〜p. 17.

(33) a. a. O. S. 11.

(34) a. a. O. S. 73.

(35) カール・R・ポパー　内田詔夫・小河原誠訳　「開かれた社会とその敵」(第一部) 45頁　(1980年3月　未来社)
K. R. Popper, The Open Society And Its Enemies, volume 1, 1945, p. 29.

(36), (37) カール・R・ポパー　小河原誠・内田詔夫訳　「開かれた社会とその敵」(第二部) 15頁　(1980年6月　未来社)
K. R. Popper, The Open Society And Its Enemies, volume 2, 1945, p. 5.

(38) 上掲書101頁。op. cit., p. 104.

(39) a. a. O. S. XVI

(40) カール・R・ポパー　内田詔夫・小河原誠訳　「開かれた社会とその敵」(第一部) 157頁　(1980年3月　未来社)
K. R. Popper, The Open Society And Its Enemies, volume 1, p. 157.

(41) このことを，難波田春夫教授は，「見えるものの，見えないものへの結びつけ」(collatio visiblium ad invisiblia) と表現しておられる。難波田春夫著作集1「社会哲学序説」241頁 (昭和57年10月　早稲田大学出版部)

(42), (43), (44) カール・R・ポパー　小河原誠・内田詔夫訳　「開かれた社会とその敵」(第二部) 24頁 75頁，76頁 (1980年6月　未来社)
K. R. Popper, The Open Society And Its Enemies, volume 2, 1945, p. 16, p. 77, p. 78.

NII-Electronic Library Service